

スポーツまちづくりへの参加を通じて構築されるソーシャル・キャピタルは、孤独感を低減することによって人生満足度を向上させるのか？ ：「野球のまち阿南」における事例研究

スポーツビジネス研究領域

5023A060-5 松島 文文

研究指導教員：佐藤 晋太郎 准教授

【緒言】

第3期スポーツ基本計画では、スポーツを活用したまちづくりの推進に関する方針が掲げられている(文部科学省, 2022)。実際に、近年では多くの自治体がスポーツまちづくりに取り組んでおり、例えば徳島県阿南市は野球によるまちづくりを推進している。

スポーツまちづくりに関する研究ではソーシャル・キャピタルに一定の関心が向けられており(e.g., Schlenker, 2013; Welty Peachey et al., 2015)、スポーツイベントに参加することによってソーシャル・キャピタルが構築されるということが分かっている(Zhou & Kaplanidou, 2018)。また、スポーツを通じて構築されるソーシャル・キャピタルはウェルビーイングの一側面である人生満足度の向上に寄与するということが明らかになっている(Zhou et al., 2021; Zhou & Kaplanidou, 2023)。しかし、ソーシャル・キャピタルとウェルビーイングの関係についての議論はまだ十分ではないということが指摘されている(Xu et al., 2023)。

一方、公衆衛生の分野に目を向けると、孤独感がウェルビーイングの脅威となりうるということが問題視されている(McNamara et al., 2021)。そして、低い水準のソーシャル・キャピタルが孤独感を高めるとのこと(Nyqvist et al., 2016)や、孤独感が高いことが人生満足度の低下につながるということ(Goodwin et al., 2001; Hong et al., 2023)が報告されている。

本研究では、スポーツまちづくりの事業が展開されている地域の住民に焦点を当て、事業参加経験、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタル、孤独感および人生満足度の関係を明らかにすることを目的とする。具体的に

は、事業参加経験が、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルおよび孤独感を介して、間接的に人生満足度に関わっているというモデルを検証することとした。

【先行研究の検討】

スポーツイベントへの参加によって生まれる社会的な交流がソーシャル・キャピタルの構築につながるということが報告されている(Zhou & Kaplanidou, 2018)。また、スポーツイベントを通じて構築されるソーシャル・キャピタルに着目した研究では、スポーツイベントの社会効果としてのソーシャル・キャピタルに焦点が当てられており、その効果に対する人々の認知が扱われている(e.g., Oshimi, Taks, & Agha, 2023)。そして、スポーツイベントに参加した地域住民は、参加しなかった地域住民よりも、肯定的な効果を認知しやすい傾向にあるということが示唆されている(Chen et al., 2018)。このような現象については、心理的連続モデル(Funk & James, 2001)をもとに説明することができる。

孤独感を実際の人間関係が自身の理想と乖離することによって生じられるものであるため、社会的要因の影響を受ける(Nyqvist et al., 2016)。例えば、公衆衛生の分野では、ソーシャル・キャピタルと孤独感の間に負の関係があるということが実証されている(Nyqvist et al., 2016; Mao et al., 2023)。この関係については、社会的欲求理論(Zhang et al., 2014; Uyanne et al., 2024)をもとに説明することができる。

孤独感と人生満足度の間に負の関係があるということは既の実証されている(Szczęśniak et al., 2020)。この関係については、自己決定理論(Ryan & Deci, 2017, 2020; Swinkels et al.,

2024)をもとに説明することができる。

以上のことを踏まえ、事業参加経験は、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルおよび孤独感を介して、間接的に人生満足度と正の関連があると仮定した。具体的な仮説は以下の6つである。

- H1: 事業参加経験は、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルと正の関連がある
- H2: スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルは、孤独感と負の関連がある
- H3: 孤独感は、人生満足度と負の関連がある
- H4: 事業参加経験は、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルを介して、間接的に孤独感と負の関連がある
- H5: スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルは、孤独感を介して、間接的に人生満足度と正の関連がある
- H6: 事業参加経験は、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルおよび孤独感を介して、間接的に人生満足度と正の関連がある

【方法】

本研究では、野球によるまちづくりを展開している徳島県阿南市の事例を取り上げることとした。そして、横断的研究デザインを採用し、阿南市民を対象としたアンケート調査によってデータを収集した。その後、調査によって得られた228件の有効回答をもとに分析を行った。

【結果】

本研究では、構造方程式モデリングによる仮説の検証を行った。なお、間接効果の検定においてはブートストラップ法を用いた。結果として、本研究における仮説は全て支持された。

【考察】

スポーツまちづくりの事業に参加することによって生まれた対面での交流がソーシャル・キャピタルの構築に有効であったと考えられる

(Townsend et al., 2016)。そして心理的連続モデルを踏まえると(Funk & James, 2001)、事業に参加したことがある人々は心理的なつながりが強く、それゆえにソーシャル・キャピタルが構築されたという肯定的な情報に対する認知が高まったと推察される。また、社会的欲求理論を踏まえると(Zhang et al., 2014; Uyanne et al., 2024)、ソーシャル・キャピタルが構築されたということに対する認知が社会的なつながりや対人関係に対する欲求不満を改善し、それゆえに孤独感が低減したと推察される。さらに、自己決定理論を踏まえると(Ryan & Deci, 2017, 2020; Swinkels et al., 2024)、孤独感の水準が低いことは他者と関わりたいという欲求が満たされていることによって裏付けられ、それゆえに人生満足度の向上につながったと推察される。全体として、スポーツまちづくりの事業に参加することでソーシャル・キャピタルが構築され、それを認知することによって低減した孤独感が人生満足度の向上につながるとことが示唆された。

スポーツマネジメントの分野でも孤独感に関する知見を得ることの重要性が示唆されているが(Oshimi, Kinoshita, & Yamashita, 2023)、まだあまり蓄積されていない。今後はウェルビーイングを規定する要因としての孤独感にも着目することが望まれる。また、社会的側面に目を向けると、スポーツまちづくりに取り組んでいる自治体は、まちづくりの指標でもあるウェルビーイング(内閣官房, 2022a; 内閣府, 2023)を向上させるために、地域住民の参加を推進すべきであると考えられる。一方、地域住民にとっては、スポーツまちづくりの事業に参加することが自身の心理状態を良好に保つための有効な手段の一つとなるだろう。

【結論】

事業参加経験は、スポーツまちづくりによるソーシャル・キャピタルおよび孤独感を介して、間接的に人生満足度と正の関連があるということが分かった。